

# 小美玉市の歴史を知ろう⑪

## 縄文時代の塩づくり

### 下滝遺跡と下平前遺跡



塩は、私たちが生きていく上で、欠かせないものの一つで、調味料、保存料、工業用として幅広く使用されています。それは、縄文時代でも同じことで、ある方法で塩づくりを行っていました。

縄文時代の終わりの頃（約3,000年前）になると、海水を土器に入れ、煮詰めることによって、塩を手に入れました。ご存知のとおり、縄文時代の霞ヶ浦は、海とつながっており、塩分が含まれていたからです。

製塩土器は、海水を長時間煮詰めるため、赤く焼けこみ、海水から出るにがりが付着していることもあります。また、火を受けて割れたり、塩を取り出す際に割ったりして破片で発見されることがほとんどです。

ただ、製塩土器が出土しただけでは、製塩が行われていたとは限りません。塩の生産地から、塩がこびりついた土

「製塩」を行う際に使用した専用の土器を「製塩土器」と呼んでいます。この土器は、火が良く回るように底が尖った形で、さらに、厚さを極限までに薄くするため内外面を削った痕跡があります。

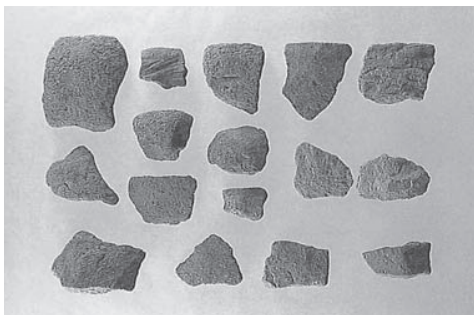
近年の調査で霞ヶ浦に面する標高二、三mの低地に位置する下滝遺跡や下平前遺跡において、製塩土器がまとまって出土しました。

器ごと運ばれることがあったからです。調査では、塩を煮詰めた炉跡や火を燃やした灰などは確認されませんでした。しかし、低地に所在することや比較的多い製塩土器が出土したことから、下玉里平山地区一帯で製塩が行われていた可能性が高まりました。

霞ヶ浦では、南岸を中心に実際に製塩を行っていた遺跡が点在しています。

低地に所在する法堂遺跡（美浦村）では、出土する土器の八〇％以上を製塩土器が占めていて、焼けた土や灰を大量に含む層が交互に積み重ねられていました。

霞ヶ浦を臨む台地上にある上高津貝塚（土浦市）では、製塩土器が出土し、製塩に使



下滝遺跡出土の製塩土器

用したと思われる大型炉が検出されました。この炉の中の土や土器には、分析の結果、海水に含まれている成分が見つかっています。

上高津貝塚と同様に台地上の部室貝塚（小美玉市）でも、多数の製塩土器が確認されています。この土器が、「生産地から持ち込まれたのか」、「製塩を行った結果なのか」、今のところよくわかっていません。

霞ヶ浦沿岸では、縄文時代も終わりの頃になると、気温が低下して温暖な環境が一変します。霞ヶ浦周辺でも、魚介類などの食糧が枯渇していく様子が部室貝塚などで確認されています。そして、重要な交易品であった貝の獲得が難しくなると考えられています。その代わりに重要な交易品に台頭してきたのが塩であつたと想定されています。そして、塩を新たな交易品として、不足していた食糧を獲得し、集落内の生活を維持していたのではないかと思われます。

## JA常陸小川の子育て支援プロジェクト

JA常陸小川では頑張るママを応援します!!

紙オムツ3カ月分（毎月1セット×3）をプレゼント致します。

※お申込は、生後3カ月までのお子様のいるお父様・お母様を対象とさせていただきます。  
※応募多数の場合、予告なく終了させていただく場合があります。



詳しくは、下記JA窓口担当者までお問い合わせください。  
小美玉市川戸1397-8 JA常陸小川 小川中央支所  
TEL0299-58-3400 FAX0299-58-7760 担当:信戸